



1875
8

山
田



Handwritten text in the upper right section of the left page.

Handwritten text in the middle right section of the left page.

Handwritten text in the lower right section of the left page.

Handwritten text in the lower right section of the left page.

Handwritten text in the lower right section of the left page.

Handwritten text in the lower right section of the left page.

Handwritten text in the lower right section of the left page.

Handwritten text in the lower right section of the left page.

Handwritten text in the lower right section of the left page.

Handwritten text in the lower right section of the left page.

Handwritten text in the lower right section of the left page.

Handwritten text in the lower right section of the left page.

Handwritten text in the lower right section of the left page.



うゝの心志と入ゆるりてせんときりし如く

水原抄之是の女文とせしむ信之養字不實一為養之
清奉内裏傳也詞之あらうらふかしく回すく見
せしむとせしむりしきしゆりし海やこゝの心
とせしむりしきし養一行くとけり養字不實
けりし如く

昔懐命と昭志なるやうの法に染くけりし如く
との見えありしきしひしとせしむ

楊貴妃馬嵬けりしとせしむ昭志と感状とせしむ
よきと懐命とせしむ

けりし如くけりしとせしむりてけりし如く

と懐命とけりし如く養家宰府りしと今迄にけりし
と懐命とけりし如くは例と

けりし如くけりし如く 女文女の

けりし如くけりし如く 名櫛也 は典例の下に他を族也とけりし如く
古櫛と同一者櫛華族也

けりし如くけりし如くのけりし如くけりし如く
けりし如くけりし如く

竹取翁 古和名 けりし如く物語 源明記と古類

心持とけりし如くけりし如く

神異記曰南方有大心長廿里晝夜火風雨不滅火中
有龍重百斤毛長三尺為布若不淨火焼く即
淨号火浣布也

十洲記曰大林有大獸如龍毛長三尺取之以為布名
火浣布有垢行唯以火燒布之良久出垢之白如雪
太子焉布取曰曝泉亦桂鶴浣火有炎光

一 火浣布のありては此にけりし如く

巨櫓相見 一説は巨櫓合衆 相見同人之く 但女子は敵志相見の相見
元代人の合衆仁明有品の人 義和四年九月廿日富沙所記
此貫之 道凡若之 凡若若之 見惟京直中御

か人やかまのれきとんりて

紙屋へくもてま成りすれりす

くれきい唐侍やくりとも物りり

くかまらきうい信凡おわ移らぬ回よる

うらり物終才一のまよわしけし

ううわもい忍風りうひて波刻回行ぬ梅檀本

下に翠しひきてあそふりて翠とす

うそり河うぬ霜雪とうせり比とうこす

くうりてみ成あきり

きりり玉りらや 又又玉あまの 黄玉勿端ん

ふんつねりてみら風り

た書(少志)元名尸常則 天曆以書工也

木工頼小野道風 正四位下 兼侍部 兼左大臣 兼右大臣 兼大納言

いせりの緒の上三位いり

伊豫物語 兼平の伝 伊豫物語 上三位 古物 上三位 中位 中位

兵束の丈志のたり 上三位 物語 事也

むかひ志とい玉氏女也 は権上 伊と少い 小丈志いりあり

重明銀と女

い又中將

在原業平朝臣 い東阿保朝臣 才又男也 号在又中

ゆ也 正五位下 兼侍部 兼左大臣 兼右大臣 兼大納言

圓行守元慶元年又月廿八日辛酉卒年廿六見三代

實録史日新貞閑齋放筆と物語 い少多子 吾作和守

いあうりりゆり

一 永嘉、曆以下依おの儀例畧く風流格也

しつゝいりきりありてふめれ移りてくるのくえとせつく
まぬ物なり紙法に學のしけりててふめれ氣風
いづれなりけりしと懸法に折致

しつゝのあしはらさく 不恥也

まふれくつしきり礼よあて まふしきり礼よいけり也
つゝしけりしつゝ 勸不盡事

夫恒の射子不供の菓子干物次供の酒友太片起座献
不盡 西文記

さしつゝと子よのぶにす物なりやあらんつゝ
とえあらんれいのらとさいとさひのりあらんれい
りてし

福諸曰有顔回志好學不遷怒不貳過不幸短命

死矣今也則之未何好學者

史記曰顏回一單食一瓢飲不幸短命死 仲尼才高

白氏文集と文人教養詩人薄命

つゝさいりつゝとれいのとせし

やや文文つゝりまかきと侍り礼樂いつれとや
完せりつゝとせしとせしとせしとせしとせしとせし

む仙窟と因基出お智也

ありとらつゝなくとちのたせしとせしとせしとせしとせし
ほのつゝとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし
あつゝとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし
はつゝとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし
へつゝとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし

一 山を竹ありて... 山を竹ありて... 山を竹ありて...

源氏文草書畫工吹笛鼓琴浮梁記也事

信大御源朝野二傳傳之長好讀去意吾亦難又書工也

丹書之妙太上天皇親自教習吹笛鼓琴浮梁記也

後之亦涉究其微旨也

あじろつとさあさうといふ

尚書察波納累代樂器不介り

物合後の事

古傳緒云并友上人等合衆人等天恒地下古人相更

中見沙記系和曆永兼共古古人永兼根合向

自上令吹笛管入書記

くもし中交りつとさあさうといふ

行りり天恒之長夏世末一統大納言白合の夜一重糸

讀白草重涉夜自錄正治

上東の信南合町人の場四夜中入梅名記

かろくの考中交りつとさあさうといふ

或女中交りつとさあさうといふ

松後取鹿明石の巻中交りつとさあさうといふ

氏むりせし

けい河しりすとる人の心むりつとさあさうといふ

天下明德皆自虞帝始此記才例始自序代

昔の毎りつとさあさうといふ

世しめあさう人の心むりつとさあさうといふ

金光明神曰獨拔而出成仙正賞

史記曰大名の下久不垢後漢書曰位高身亮親賊多

命強功成必遜而身退天常

文選日本秀お林風推し行高お人お北く運命
抄詩曰自謂頗挺而立登要路津致表竟舞上

再使風俗淳い志竟蕭條行秋非隱倫

大友里子 天智天皇十年正月任大友里子大友
天武天皇元年五月生年 祇津大云

東三奈久大友 和和七年八月七日任大友大友術元年六月十三日薨四
十五丁時大友大友傳い未例ん六を院于時廿二歳のりて

追記

才十三 松風

ゆりやありてあんとししやけけり
寝敷の妻室の居所也源氏未共仁のころや
やけけりやあはれん 礼記曰聘則為妻妾則為妾
聘同也妻し言ひし礼見同則得與支款體妾し言接
や会得接えおあ子不得與支款體也とりり 聘人以礼
迎ふ也奔は嫁んし 節合し言やさわんは案とも相妻
代人の寝敷居せりりん

二乃若き人の心なせしやせふ

のれせしをさうねわはまをた行そとせのつる

じうしんをのつちりら中務の文と才こころる

ゆきうお大井河のわらわにむすし心置けり

二

新中書王勳明事ん号小倉文

菴亦名賦之余龜心下柳卜幽居祥寢体身歎
老亦此遯草嘗之漸成爲執政志任被陷矣
君臣昏信 彼世處千想

何人きとわあをわらん 上流 界りのりせ
あけり 貴のやあわりのて 物まにあやあは

野等 藪 下屋 非令

かろとわりのりせよとてかきくもふとありて

こころわいのも人おのりふん成り肩とてさじり
つるりの世俗り肩とてあと言ん

文選曰息肩枕漢飲戴之祖といひのけり

人何のたふけりといふ物りつるよあれり
り大つりあもたたりりて

氏部大捕作の事ん勳明親と二男位位上事
又子古氏アス物

そくらの事とて

こころはしつるにさかるとさくらあつらひさし人

強顔つらひてくらしくは撥撫ん

語少納を枕多子といけらしる男り志丹つとたりあり

多しといふにさしあわむ 春

りしたるるとありあつて 申あつて

大くつらさるあつてはつてのつらさるすむ

らさるなり 又子守事

舊記曰正子内親と信和 兼和七年十二月日道信和

貞觀十一年二月廿二日議議院お大子守奉淳和院

大和令自請議議院爲大子守中養女見家

二

集應和元年二月廿三日御記曰石丸太尉おあ定編
ち別當希議重伝胡片為太学より別當

浙及事一 古人人を高名おくを太学守南

孝部王記建永年於西震寺法和才七親王國志後

傳舎大納言及入礼太史お浙及小郭堂信南堂傳説

語大納言及入礼太史お浙及小板進水飯紫明抄意公

而令全浙及共浙与野のつくたすすとじ下と

と榮古人け木の舎人ちよ作帝義ときこらたれ泉

殿といふを太学る浙及たとゆり海とゆり

詩よ浙と飛泉曝泉り作と長矣者なり太学守浙

ちうつ下毎

曰余大納言家集と語誠の太学守しりかりてこれ見
るるゆり守るしりかり

浙の者いそそろく女おまともをけりたきこくま

後拾遺集と たきとのほく 赤深津

あせりきり今ふかり浙つをなるそ人ちみえりり

お別集と太学守りしりこの石田信つるわくわ

くたるおときしてらんしりかりて赤深いりたより

りかん多んたりありいそそろく

いりたあおかりしりしり浙つ其その柄をてじりりり

小倉代里高麓太学守泉落枕聲 おま

東北信りしり及の屋り水しりけりりりりりり

新らまりりりりりりりりりりりりりりりりり

作とりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

病のりりりりりりりりりりりりりりりりりり

たれはるくかめと海し

明月入るるる居るやうに思ふに
一洗されしうららかなる影とさし
見る事とあれく

ありそわいのらうららかなる影とさし
みる事とあれく

わらわいそらうららかなる影とさし
みる事とあれく

夜中に帝有光明故は名光玉と

奥入は中玉とあり不審也

とらふに物いそらうららかなる影とさし
みる事とあれく

孝仲曰詩曰夙興夜寢是亦尔不生
寢進徳行業以之亦亦其父母

かりそわいのらうららかなる影とさし
みる事とあれく

多責不帰たつた夜錦衣行
紫くけの橋不叶可劫

天よしまるく人あやあきうらのうららかなる影とさし
みる事とあれく

天人墮三途事 契天との案文て田三途

衆しは義前ね下らん船へつらと三途といふ天より
生いこゝら吹明石浦は流布のりこゝらの一河
つちとや天よりつらと三途と墮するも、もしえ統の朽
言頗不便ん如何

何れ別よんか

伊呂波世にいふ別りさるるを代もといふ人ままため

昔の人よあねむひさ浦の須奇たなりせむ

やうくともあつてのうれ物寄し語られり舟とせむ
けりよとねとつて初めけむとてふあらん中古先達
うと成せむ成家傷又お極うをわらうにたり我
理甚深のなり

うききしに 彼岸也

いづり約ふ林ととくつとまき 梶ありて我々 梶なりん

張寔漢武帝此使とく梶よ衆とく天漢の漢と宛

に孟津よつて牛女よあひくつりしむとむい
初らん文選よ十年とほり三才歳とつくぬまなり
り年紀よ仁徳と早の河漢の國大井川よとてまきなり
大本流下とよく枝個人昔子籠け本とわく始く船と

作おく南海へつて却波浦り付進是と号の船と
まのあゝ蓋着は袋と用とね白り年紀りし舟物義徳
軽子とつとわく舟と華船或る程若椽樟舟以下多あり

四孫ありくより行り舟と舟あり又神武天皇奉崇神意
神天甲の河と舟と造とくつら若し河海布の船と
姿昔子新始く造おらん

力とつてありくつら若し河海布の船と

二

明石寺と云ふ明石と云ふ先主の御廟に於ては伏見の
如くに松風と云ふわづらひの御廟に於ては
うたはせの御廟

崇峻天皇元年三月始建法興院 と云ふ興寺

水原抄云大秦寺於宇麻作 り記 又号葛野寺也
葛野寺と云ふは秦川橋邊之藥師佛也且其藥
と云ふは西の堂と云ふ藥師佛也其御廟ありと云ふ
衆と云ふは西の堂と云ふ藥師佛也其御廟ありと云ふ
邊也と云ふ八年三月廿日御記曰令之補御在太皇
陽殿茂樹可為桂院別當と云ふ と云ふは法興院也
と云ふは西の堂と云ふ藥師佛也其御廟ありと云ふ
と云ふは西の堂と云ふ藥師佛也其御廟ありと云ふ

晋王質の石室と云ふは西の堂と云ふ藥師佛也其御廟ありと云ふ

乃柄と云ふは事也と云ふは西の堂と云ふ藥師佛也其御廟ありと云ふ
述異記曰晋王質伐木至信安郡石室山見數童子
与質一物如棗核含之不飢局未訖斧柯爛盡既歸
後人群問志云石室山一名石橋山一名石室山晋中
朝貶者王質者嘗入山伐木至石室者童子數人彈
琴而晋目放斧柯斲童子以一物与質状如棗核
含之不復飢遂傷小停復謂質童子語曰汝來已久
何速不也質應色而起柯已爛盡

と云ふは西の堂と云ふ藥師佛也其御廟ありと云ふ
今よりと云ふは西の堂と云ふ藥師佛也其御廟ありと云ふ
好むと云ふは西の堂と云ふ藥師佛也其御廟ありと云ふ
つらと云ふは西の堂と云ふ藥師佛也其御廟ありと云ふ
是は伊豫の造文と云ふは西の堂と云ふ藥師佛也其御廟ありと云ふ

くさくさなねいづつ物くぐさうらあかりき
まのまはみあめ可くやうたのけうを
まのまはみあめ可くやうたのけうを
まのまはみあめ可くやうたのけうを
まのまはみあめ可くやうたのけうを
まのまはみあめ可くやうたのけうを

ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ

軽 リカ 袷 アサ 冴女共着し美人

ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ
ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ
ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ

ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ
ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ
ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ

ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ
ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ
ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ

ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ
ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ
ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ

ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ
ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ
ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ

ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ
ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ
ありのくさの 阿伽具
ほうきくわ

何とをいひしに... けり九...

うらけある... けり九...

や... けり九...

か... けり九...

九... けり九...

浄也事

九... けり九...

松のじり...

維... けり九...

わ... けり九...

今... けり九...

心... けり九...

君... けり九...

御食の事

こ... けり九...

小... けり九...

つ... けり九...

と... けり九...

あ... けり九...

度... けり九...

二

あひ行し時らるる〜
 ほろもたるあり〜
 とみりし時のさし

おつらん〜
 進喜舎人〜
 物のあはれ〜
 祢林の町〜
 祢林の長

わはれ〜
 祢林の長
 祢林の長

次生輝見難〜
 注 旧事本記

明ら非去三歳〜
 祢林の長

着裳事なり
 志ん〜

天の御ま〜
 祢林の長

入の所を病くたひくうとぞ物もしく神も交りまらる
けりもあつりあつり女もんつりまきり男もいづくくむ

人をもさあつれいづいありあつるえらうらうらおとつり
家統もあつりいづくあつるいづくあつるいづくあつる

宿もくあつりあつるあつるあつるあつるあつるあつる
いづくあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる

恨もあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる
母もあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる

朱雀院の延喜才十一村上天皇の才十の皇子とてわたり
けりあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる

二の即位ありまはるあつるあつるあつるあつるあつる
皇子とて賢女ありあつるあつるあつるあつるあつる

人をもさあつれいづいありあつるあつるあつるあつる
故大納言のしきいもあつるあつるあつるあつるあつる

先行しけりあつるあつるあつるあつるあつるあつる
大納言の系信の所けりあつるあつるあつるあつるあつる

しり大納言のしきいもあつるあつるあつるあつるあつる
言と贈た故たはあつるあつるあつるあつるあつるあつる

いづくあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる
光 業 女見 日記

形もあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる
いづくあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる

いづくあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる
あつるあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる
あつるあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる

いんこうあかつきのね ねねに不限男女酒交也

尼兜

いんこうあかつきのねにせ行く 列女に

わらわのうしろにきりさつひぬつるいんこうついで

平織 袴 袴 一匹 織成袴 後安治記和名曰 多良女

延喜神事或云 表裙袴袴

一説云玉平織トテ 袍ト玉トウ所りくくくも也女に也

と云ふも瓜越の以礼地の以礼六物の以礼をとりて也

袴ふすまと云ふも本織ト袴ふすまと云ふも古式拾遺ト云

高為斗袴ゆきとのうきゆき拓ゆきゆきゆきの酒交ゆきあり

玉たまだたまきたまけたまぬたま河たまくたまれたまをたま町たま毎たまうたまるたまのたま是たまはたまもたま入たま

たたまたきたまたのた七た百たのた何たらたいたるたとた行た

いんこうあかつきのね うちわに勿論に

あといりこむらりすひて行あり

九久良比止曾乃不祢止く女くにく未く多く阜

止と百と知と以と久と礼と每と見と天と可と安と戸と利と已

平へ也へ曾へ与へ也へ安へ春へ可へ干へ利へ已へ字へ曾へ於へ上

於お已お曾お安お春お上お毛お以お波お女お平お千お可お太お仁お三

以い万い九い取い世い那い波い安い春い毛い九い祢い已い也い曾

於お与お九お女お毛お九お祢お已お之お曾お与お也お 樹人

母ははしははりははらははるはは人はは志ははをははくははとはは海はは入ははせははるはは也はは

水表 水表 遠方 波方

を言の取くくく白浪のきくや我も無わく海

せねまき 兄 日事記 肖書 万葉

行てみくあきまふ録人申すにいとらるる人かんとおと
早来しとく之ん又三實来 まじしよんとい伊勢の保中しはまよ
わらんといり鉄ありんとい

世中い夏のまらぬら木橋うらわらうやととも思
いさくらくまんとわたりる 意ん意飲のつこ
いさくすまうりといのつらりれ事い 教示ん

あまの穴あもまはつる月日星のりりるをれ
とまひありとのこ

今日陸陽寮頭一人掌天文曆教風雲氣文信天
文者日月五星廿八宿也曆教者曆計日月星辰
教而造曆授可也氣文者凡そく氣文之言以書
く又視者占十二風氣知共姤祥

應和二年七月廿日黒雲氣一条廣三人許起坤
貞良 康保二年正月五日 白雲廣三人許起天巨

東西

からくさくさくさく 祐道勅文
うらうらうらうらうら 現様ん現の現人 ツギ
ミツ

重武と申す神龜二年相子後唐國来延種種子又
女草之相子と毒くの病者並食ん

院のいんをうらうらうらうらうら
寛平二年勅た大臣源朝白事斬依病を親
わ板寛平遠誠と右大臣と薨言す之驗
わりし大中の清りうらうらうらうら

如煙盡燈滅 はる

論衛曰人之死也猶火之滅也而耀不照人死而
智不慧

かりけふとせく豪家 千人御講豪 又豪家

史記注揚冠子曰德百人者謂之後德千人者謂之豪
德百人者謂之英也

殿上人をかつくりの多からりてあつてあつて
喜ばれり

村上の記云天曆八年正月廿日母后崩古也日今御撤
尋常御簾改懸意簾洗文細布以端習類

深草の跡へ橋をいあつてけりい馬深まこけ
心の傍部 法智僧類 推古天皇代被定置傍僧

天服

何益

佛のいさめりる路志人たつて道よふ

真言秘蔵事也

たふ人ゆりてふのくひゆらん 恒物

地の日中替つたのたこつて行つたりすゆふ

枕崗或やつた文こつて中替つたりたり

口記云延喜元年十月十六日在長養寺武平親王薨逝

天変

ゆりて世よこつてゆりてしむる事とらりて
ゆりてわつていさか人ゆらん

克湯負洪水大旱貴高宗成王有雉雉逐

風し愛雉小異不失大德

及成王用事人或讀因云牛年楚史記

貞觀政要曰黃帝与蚩尤七十餘戰甚矣既勝之後
便致太平九黎亂德顛頊征之既剋之後不失其
治樂為暴虐而陽放之在陽之代即致太平付
尚之道武王伐成之代亦致太平

本朝延表聖代高家及連事以下和漢先破之備計
りわくしよいけりしれどもおのひくもなかりかろしと
秦始皇、燕襄王の子なりて位、即といふも實に始
皇の母太后嫪毐母名不事といひ下は秦通して
不生、見史記傳

一世の源氏納言太長ありておらよ又ありし今こそ今
位ありしとさるいへりし此例ありきや

一世源氏納言の位例

光仁天皇 元大御

桓武天皇

元後五位上大學中督

光孝天皇 元平或元
日人記

宇多天皇

貞元二年賜源氏位
仁和二年為親之即位

或いは是忠親

元慶二年四月十日賜源氏
寛平三年十二月廿九日之親
元中御之即位

太宰帥是貞親

賜源氏位九十九持はり

中務少丞明親

貞元二年四月為親王
元元七年二月源氏

上野太守威明親

康保七年七月為親王
元保七年二月位下

のくわいしきくくくくくくくくくくくくくくくく
能中車

寛弘八年八月在太長友原朝臣宗平車約賢門上東
門兼平二年九太后宗車友上東の信と太長源朝
寛平元年十月十九日勅宗禁車車太長源慈明天
延二年二月廿八日能中車

王命のくくくくくくくくくくくくくくくく
左傳云晉太子圉為質お秦將逃歸福云胤子曰予子

歸平 蘇子系前 對曰子晉太子而辱於秦子之歎

歸不亦宜乎 寡君之使婢子侍執中櫛 婢子

早梅 以同子也 後子而歸 寡君命也不敢從

夫人曰 子之歸 亦宜乎 寡君之使婢子侍執中櫛

百華のひとく 杖の夕暮り 思ふに 旅人 人の心 けり 死

あはれ わるき こと じや

我のしる こと 事 なる けり 杖のすく こと けり

古のしる こと 事 なる けり 杖のすく こと けり

此のふり こと 事 なる けり 杖のすく こと けり

一六條の 文と 事 なる けり 杖のすく こと けり

為る こと 事 なる けり

杖のしる こと 事 なる けり

杖のしる こと 事 なる けり

千公 高門 事 なる けり

千公 東海 人 こと 事 なる けり

と 文子 事 なる けり

一 駒馬 事 なる けり

と 杖のしる こと 事 なる けり

定玉 大長 事 なる けり

定玉 大長 事 なる けり

定玉 大長 事 なる けり

杖のしる こと 事 なる けり

晋石 季倫 辰 合 春 屯 海 朔 作 五 十 里 錦 障 逢 春

不遊 樂 恐 是 心 人 事 なる けり

百葉 才 一 天 皇 詔 内 大 臣 有 原 朝 長 競 憐 王 山 百 華



